
運命のアトリビュート

ういりー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命のアトリビュート

【Nコード】

N7256X

【作者名】

ういりー

【あらすじ】

世界には7つの属性がある。

火・水・風・土・雷・光・闇の7つ

この属性に選ばれたものはリビューター（属性師）と呼ばれ、凄まじい力を得るといふ。しかしなれるのは属性1つにつき1人

そんなリビューターを目指す青年が1人学園で修行に励んでいた。そのアトリビュートが引き起こす過酷な運命も知らずに……。

FC小説にも同タイトルで掲載しています。

第一章 出会い〜蒼白の炎〜（前書き）

初めまして、拙い文章ですが読んでいただけて幸いです。

ストーリーは何年も考えてどう形にしようかと考え

小説にしました。アドバイスなどあったらよろしくお願いします。

第一章 出会い〜蒼白の炎〜

「さあて！授業終わった！修行だ！」

それぞれ帰り支度を始めている教室内で桜井壬斗はいつもどおり叫んだ。

「壬斗！それ恥ずかしいから辞めてっていつも言ってるでしょ?!」
声を荒らげて注意したのは幼馴染の如月椎菜だ。

「なんだよ椎菜！開放感に浸って何が悪い？」
壬斗は純粹に質問を投げかける。

そんな彼に答えたのは親友である大王司鎧

「まあ、悪くは無いけどよ、取り敢えず椎菜の言うことは聞いとけ！」

「それはそうだな、逆らうとどーなることやら」

壬斗はいきなり思い出したかのように言う

「そうだ！学園の近くに空洞を見つけたんだ！一緒に修行しようぜ？」

しかし反応は鈍い。

「あたしはパス、家事の手伝いがあるし……。」

「俺も無理だな、お前の修行に付き合う前に自分の家で修行だしな」

椎菜はともかく鎧に至ってはこの聖アトリビュート学園を創設し学園が存在する属性都市を作り上げた大王司グループの社長の孫だ。当然、学業や武道で毎日忙しいらしい。実際彼の家系には世界中に7人しか存在しない
リビューター（属性師）が何人かいるほどだ。

「まあ俺1人でいくよ……」

壬斗は寂しく呟いた。

「無茶しちゃダメよ！いつもどこか怪我するんだからね」
壬斗は椎菜の言葉に手をふり教室を出た。

その修行場は入口を見つけるのは困難だが学園から数分の場所に存在していた。

薄暗い空洞には何か導かれるものを壬斗は感じていた。

「本格的だな、魔物が巨大生物は居てもおかしくないぞ」

属性学園の外側には属性のエネルギーによって肥大化した生物が闊歩している。

しかし都市内では警備システムが作動されており、まず遭遇することすらない。

学園の生徒には教科書でしか見ない存在だ。

そんな未知の体験があると信じ空洞へと足を踏み入れた。

薄暗い空洞を進むと少し広めの場所に出た。

視界はあまりよくないが鉱石のおかげか存在を確認できる程の明度はあった。

そしてその視線上で蠢く影が一つ……。

「こいつは当たりだな」

それは体長50cm程度のバツタのような生き物だ。
この空洞に流れるエネルギーによって肥大化したものだろう。
軽視できないが壬斗は落ち着いていた。

「このために修行してきたんだ、なんてことはない！」

言い聞かせるように壬斗は用意していた訓練用の長剣を抜く。

その刹那、魔物とも呼べる生物の脚部に力が入るのがわかった。
壬斗も直ぐ様構える。

直後魔物は飛びかかる、予想を上回る速さで

「早っ……！！」

壬斗はすんでかわすが、あまりの速さに反応が遅れ左腕を擦る。

「成程、実戦こえーな」

その左腕からは軽傷だが血が滲む。
痛みを余所に魔物の位置を再び捕捉し直す。

振り返ると魔物は狙いを定め、脚部に力が入る瞬間だった。

「この瞬間なら……！」

タイミングを見計らい壬斗は長剣の刃を真っ直ぐに突きつける。
その魔物は同じ勢いで正面に突っ込んでくる。
結果、突き出した刃に頭からそのまま突き刺さる。

さながら、串に刺さったイワナ状態である。

無論、魔物の息はない。

「うげえ、これが初勝利かよ」

そんなことを呟きながら魔物を抜き、放り投げた。
実戦の恐怖と新鮮さを味わっていた自分がいた。

軽い興奮状態だ。

初勝利の余韻に浸っている彼にはその存在に気づけない

その『強大な存在』に。

瞬間、壬斗の体が轟音の後に宙に浮き壁に弾き飛ばされる。

「うあつ……？」

思考が追いつかない、背中に激痛が走り状況が整理できない。
その方向を目で追ってみる。

それはいた、先程の魔物とは格が違う。

体長5mはある大物、見た目から察するに恐らく親だろうか？

『強大な存在』はギリギリと近づいてくる、それは自身の死への力
ウントダウンと同意義だ。

今まで感じたことのない恐怖を感じる。

「嘘だろ、死ぬのか？！リビューターにもなれないまま！」

無常にもカウントダウンは止まらない。

死が目前に迫り、巨体の豪腕が勢い良く降りかかる。

「くそおおおお！」

死を覚悟した瞬間、微かだが焦げたような臭いを感じた。
その臭いは段々と強くなる。

そして潰され死んでいたはずの壬斗は『生きている』
激痛が走る体を押して状況を確認した。

『強大な存在』は青い炎に全身を焼かれ朽ち果てる寸前だ。
状況の変化の速さについていけない壬斗はある人影に気づいた。
黒い長髪、全身黒づくめの美青年だ。
そして咳く

「貴様がリビューターに？冗談でも笑えんな」

そこで俺の意識は薄れていく

第二章 覚醒のとき／鮮烈の稲妻

目覚めると壬斗は自分の部屋のベッドに横たわっていた。どつやらあの男に助けられたようだった。

「うつ……いててて」

いまいち意識がハッキリしない……ただ……

そのハッキリしない中でも『あれ』だけは鮮明に憶えている。

そうあの黒尽くめの美青年の手から発現していた『蒼白の炎』の事だ。

そして何より気に食わなかったのはあの一言。

リビューター？冗談にしては笑えん……。

自身の夢を貶されたようで壬斗は苛立ちを隠せなかった。

「あの野郎、今度会ったら色々聞かせて貰おうじゃねえか！」

とベッドの中で意気込んでいると、ノックもなしにドアが開く

「まったく、怪我人が何騒いでんだ？」

部屋に入ってきたのは赤毛で目付きの悪いヤクザ風な男

だがこれでも歴とした俺の親父だ。

「ノックもなしに入ってくんなよ！バカ親父。」

「てめえは思春期の女の子か！だまって寝てろ！」

親父は平然とタバコを吸っている。

「親父、仕事サボりに来たんだろ？」

親父はバツが悪そうな顔で答える。

「あ？あ？ち、ちげーよ！息子が心配だから見に来たんだよ！」

どう見ても焦っている。親父は昔から単純だ。

「早く戻ないと母ちゃんに言っぞ」

「どうせ暇だから大丈夫だよ」

俺はいつもどおり大声を張る素振り見せる。

「ああ！わかったよ！戻るよ！だから黙って寝てろ」

実家は宿を細々と経営している。

書き入れ時は休日なのは鉄則で、平日は今のよう親父がほつつき歩いている程暇だ。

と気づいたらまだ背を向けた親父はいた。

「親父、なんだよ？」

「無茶はいいが、死ぬような真似はすんな……母さんが悲しむからな」

そう言い残すと仕事場に戻っていった。

「……確かに今回はやばかったな」

あれはラッキーとしか言いようがない。

ムカつくがあいつが居なければ今頃、あの生物に潰されていたことだろう。

それと同時に寒気を感じた、あの死のイメージを思い出して……

「今日はもう休もう、明日も学校だ！」

まだ痛みも疲れも取れない体を寝かせて、眠りについた。

翌朝の教室で早速傷のことを椎菜に怒られた。

「だから言ったのに！心配させないでよ！バカ！」

涙目で言われてしまうともうかないようがない、直ぐ様謝る。

「すまん、あんな危険だとは思わなかった……」

「だったら今度は俺も連れてけよ！」

後ろから鎧の音がする。

「もうダメ！宇佐先生に報告して立ち入り禁止にしてもらうわ！」
そんなあと鎧が嘆く、だが俺もそのほうが得策だろうと思った。

俺みたいな愉快犯が勝手に入っていていいほど野放しにできる場所ではない。

「…？」

ふと、教室内の異変に気づく。

少しいつもより騒がしい、こんな時は試験か転校生が来るかのどちらかだ。

「なあ椎菜、なんかあるのか？騒がしいけど」

「壬斗、昨日宇佐先生言ってたでしょ？聞いてないんだ……」

鎧が身を乗り出して伝えてくる。

「転校生だよ！しかも3人もくるらしいぞ！」

思えばそんなことを言っていた気もする。

「ていうか3人?!変な時期にたくさん来るな……」

そんな会話をしていたところで宇佐先生が入ってくる。

「ほらほら、席に着くんだよ〜！」

いそいそと皆席に着いた。

宇佐先生は見た目は温厚そうだが怒ると別人になるため皆黙って指しを聞く。

「さて、今日は昨日伝えていた転校生が来ているから皆元気に出迎えること―!」

この瞬間はもちろん皆ワクワクしている。

絶世の美少女か!?イケメン男子か!?

転校生にとってはいい迷惑である。

「壬斗、かわいい子だったらいいな!」

「さあな、まあ男が増えるよりかはマシか」

そんな会話をしているとゆっくりと扉が開く。

どうやら一人づつ入ってくるようだ。

一人目はなんと美少女だった!男子たちはざわつき始める。

髪の色は青色で目は赤と青のオッドアイ、とても清楚な顔立ちをしている。

続いて長身の線の細い男子。髪の毛はブロンド、キザッぽい感じが否めない外国人。

美少女が存在するためか男子の半数は彼が視界にすら入らない。

そして最後に全身黒で黒い長髪的美青年が入ってきた。

これには今度は女子が歓喜。皆実にわかりやすい。

「……ん？」

一瞬3度見ぐらいしたが間違いない。

「ああっ！！！お前！」
勢い良く立ち上がり指をさす。

皆、壬斗の大声に振り返る。

空気が騒然とし、さらにざわつき始める。

しかしその反応に昨日会ったはずの彼は無反応。
まるで初対面かのような振る舞いである。

（ていうかこの転校生との鉄板パターンをなぜこんなムカつく奴と！男だし）

冷静になると浮いてることに気づき、空気を読み静かに着席した。

「コホン、では気を取り直して彼らに自己紹介していただきましよう」

宇佐先生は美少女へどうぞどうぞと促している。

そして美少女が口を開く。

「皆様初めまして私、りん 白はくと申します。呼び名は白で構いませんので仲良くしてくださいね。」

イメージを崩さない白さんに皆男子は感動していた。

男子はすごい速度で首を縦に振っていた。

さながら狂信者の如く。女子はドン引き。

次に今回一番印象が薄い男が口を開く。

「俺はジユダス・カーミルだ！カーミルでいいぜ！ヨロシクな！」

元気で活発そうな外国人カーミルだが今回は不憫だ。

なぜなら、ほとんどはもう次の美青年に視線が集中しているからだ。

そしてその美青年は口を開く。

「私は黒条くろじょう 狼牙ろうがだ、別に憶えなくていい」

女子何人かは軽く卒倒している。

見るからに美青年だ、男子も何人か見入っている。

だが俺は無論いけ好かない。

一通り自己紹介が終わったあと宇佐先生が周りをなだめて一言。

「実はな、驚くとは思うがカーミル君と黒条君はリビューターなんだ！」

皆その瞬間、耳を疑った。

リビューターは前後継者から引き継がなければならないことが出来ない。

そんな奇跡の産物が目の前にいるなんて想像もつかないのに2人も今目前に存在している。
全員、あっけにとられている。

「あ……唐突過ぎたね、先生嘘ついてないよ！」

ここで鎧が飛び出す。

「じゃあ、何か見せてもらっていいですか？何のリビューターか知りたいし」

宇佐先生もうなずく。

「そうだね勉強にもなるし……黒条君、カーミル君披露してあげてよ！」

2人はうなづきカーミルが前に出る。

カーミルは手を前に出し人差し指を上に向けた。
その瞬間指先から水泡が現出する。

水の属性ということがすぐにわかる。

それと同時に、皆の目が輝く。

壬斗のように皆、叫んではいないが憧れには変わりないのだ。

そして拍手と共にカーミルが下がり次に黒条 狼牙の番だ。

狼牙はおもむろに手の平を上方に向ける。

その瞬間発火音と共に炎が現出した。

『蒼白の炎』が。

教室全体にまたざわつきが生まれる。

それは何故か？

教科書で見る炎属性リビューターの炎は

原則では真紅であり、蒼白であるはずがないためである。

聞いてもいいものか戸惑っている中、壬斗は迷わず質問を切り出す。

「なあなんで炎が青くなってるんだ？なんかあるのか？」

狼牙は造作もなく答える。

「リビューターにはなってるからわかる特性というのもある。それがただ炎色に反映しただけだ。」

なるほどと皆納得。

確かに実際なつてみないとわからないだろう。

そのことについては彼と同じ立場にならなければわからない。

わからないが、壬斗は何か引つ掛かる。

「まあ悩んでも確かめようがないしな」

無理やり自身を納得させた。

空気を切り替えようと宇佐先生が切り出す。

「さて、ちよつと時間取っちゃったね！転校生諸君は後ろに席用意してあるから着席しちゃってね！」

そしてざわつく教室の中

転校生も全員席に付き授業が始まった。

そして放課後、全ての学科が終わり帰り支度を始めていた。

壬斗は視線を転校生に向ける。

「って！あれ？あいつら居ねえ！！」

椎菜は呆れ顔で答える。

「いやいや、HR終わったら三人ともすぐに出ていったでしょ！」

鎧もすぐに帰ったのでそちらに気を取られていた。

「ちくしょう！ダメだ！ちよつと追ってくる！」

そういつと壬斗は駆け出す。

「ちょっと！壬斗ってば！」

「すまん椎菜！あの狼牙ってやつに話があんだ！」
椎菜の声に反応しつつ走る。

「もうっ！喧嘩とかしないでよ！！」

また昨日と同じ構図、忠言する椎菜に手を振りその場を後にした。

走ること数分、驚くことにまたあの空洞に来ていた。

「なんでここかなあ……」

しかし、なんとか追いついた狼牙は確実にここに入っていた。
よくよく考えても昨日、彼と出くわしたのもこの空洞だ。

「まあ確実にいるよなあ」

ため息をつくが足を踏み入れる。
ふと椎菜の泣き顔が浮かんだ。
踏み止まることもできる。

だが彼には決意がある。

「今回はあいつを探すだけだ！無理しねえよ」

そう言い聞かせ足を進めた。

程なく簡単に狼牙を見つけた。

「おい！黒条 狼牙！」

狼牙はゆっくりと振り返る。

「また貴様か……」

「貴様ってなんだよ！俺には桜井 壬斗って名前があんだよ！このキザ男め！」

反撃を試みる、慣れない言葉で。

「愚かしい奴め」

効果はないようだ……。

「第一何をしに来た？昨日あれだけ危険な思いをしておきながら」

うつ…と唸ってしまう。

「だが、俺の夢について貶したのは撤回しろ……！」

刹那、発火音が空洞内にこだまする。

その瞬間自分の頬に蒼白いものが擦る、熱い。

今日も死の危険を感じてしまった。

冷や汗がすごい、何より駆け出していた足は硬直して動けない。

殺気を放つ狼牙が口を開く

「次は当てるぞ？」

この男ヤバイ感性の持ち主かもしれない。
間違いなく殺す気だ。

震える体を押さえつつ壬斗は

「い、一体何様だ！いくら権限があるリビューターだからと言って
人を殺していい権限は無い！」

そうだ、ハツタリかもしれない。

教科書でも見たが宿泊施設や移動手段はタダになったりと色々な優
遇があるのは知っている。

だがリビューターでも殺人は御法度だ。

捕らえるのは困難だが都市にも他のリビューターが存在する。

確保は間違いなくされるだろう。

そんなリスクが高くメリットがない事をこの男がやるとは到底思え
ない。

「確かにリビューターとしては無いな、貴様を殺す理由など」

「だが俺がもし何かの組織に属していたとしたら？」

さらにゾツとする言葉を吐く。

この男は底がしれない……。

「貴様など殺してもその件は闇の中に葬り去られるだけだ」

確証はない、だが本気なのは目を見ればわかる。

殺気に満ちた目。

逃げてもあいつに一生嘲笑われながら生きていくのか？

馬鹿にされて……。

何よりあんな危険な奴を学校に戻したくねえ！

敢えて俺は賭けに出る

「おい狼牙、その炎偽もんじゃあねえよな？」

狼牙の顔が変わる、やはり聞いてはいけない質問なのだろう。教室の時も似たような質問をしたが、顔は引きつっている感じがした。

そこに引っかかりを感じ改めて核心に振れた質問をした。

「殺すつもりはなかったが……死を選ぶか、本当に愚かだ」
そう言い放つと蒼白の火球を壬斗に向けて放った。

(さあ、震えてる場合じゃねえぞ！動け！動けえ！！)

何度も言い聞かせ、やっとのことで体が動き出す。

幸い火球のスピードは早くはない。大きさも無い。

上体を素早くずらし火球をよける。

しかし発火音は連続して空洞内に響く！

5発くらいだろうか？火球が壬斗にめがけ向かってくる。

2発は火球が重なり避けるのは容易だった。

3発4発と来るがしゃがみ、飛び込むことでこれも回避。

しかし完全に体制を崩してしまう。

5発目は避けられる体制ではない。

とっさに持っていた訓練用の長剣を防御に用いる。

火球が長剣に当たった瞬間爆発。

凄まじい炸裂音とともに壬斗は爆発の衝撃で吹き飛ばされる。

意識は飛んでいない、しかし手にもっていた長剣は見事に折れて使えない物にならない。

「こりゃマジでヤバイな」

昨日助けてくれた狼牙に襲われている。

最早成す術なし。

「ま、媚び諂って生きるよりはマシつつってね！」
明るく言い放つが絶望感は十分なほどだ。

気づくと狼牙はそこに居た。

手には火球が用意されていた。

「さあプライドを取り死んでいったことを後悔するといい、あの世でな」

（こういうとき走馬灯がとか、時間がゆっくりになるとかあるんだろっが

なんにも感じねえ）

（死ぬのか俺——！生きて——！）

（生きてリビューターになりてえ——！）

（ちくしょおおおおおおお——！）

（あれ？まだ死んでない……）

(さっきからなんか眩しいな)

汝、生きたいか？

どこからか声が聞こえる。

(え？なんだこの声)

もう一度問う。汝、生きたいか？

繰り返し声が聞こえる。

(あたりめーだ！俺には夢がある！)

成程、夢……生きる原動力の一つか、いい
だろう。

(この声は……あなたは一体)

我が名はスサノオ、初代属性師の一人だ。
今から私の力をさすける。

『この力、生きるために使え!!』

「これは一体、どういふことだ?!」

狼牙は信じがたいものを目にしていた……

気を失っているが桜井 壬斗から電磁壁が創り出されている。

火球の効果は無し。

「そんなばかな！有り得るはずがない！なぜこいつから雷が！」

桜井 壬斗は目を覚まし、ゆっくり壬斗は上体を起こす。

「狼牙認めろよ……」

そして立ち上がる。

「俺から溢れ出るこいつは完璧に……」

狼牙の目をまっすぐ見据え言い放つ。

「雷のアトリビュートだ！！」

狼牙は愕然とし膝を落とす。

「馬鹿げている……こんなことがあっていいはずがない！」

壬斗は繰り返す、雷があふれる拳を握り締め

「立てよ狼牙、これからが闘いだ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7256x/>

運命のアトリビュート

2011年11月16日19時49分発行